

- Lamb, H. H. 1949 : Scientific Results of the Balaena Expedition 1946—47. Meteor. Mag. **78**, 104—112.
- Mirrlees, S. T. A., 1949 : Notes on Southern Hemisphere Circulation. Meteor, Mag., **78**, 315—321. (Rymill 1935—36 data compared with South American data.)
- Robin, G. de Q. 1949 : Notes on Synoptic Weather Analysis on the Fringe of Antarctica. Meteor. Mag. **78**, 216—226.
- Willett, H. C. 1949 : Long-Period Fluctuations of the General Circulation of the Atmosphere. J. Meteor. **6**, 34—50.
- Loewe, F. and Radok, U. 1950 : A Meridional Aerological Cross Section in the Southwest Pacific. J. Meteor. **7**, 58—65.
- Hutchings, J. W., 1950 : A meridional atmospheric cross section for an Oceanic region. J. Meteor. **7**, 294.
- Court, A. 1951 : Antarctic atmospheric circulation. Compendium of Meteorology, Amer. Met. Soc. 917.
- Gibbs, W. J. 1952 : Notes on the mean jet stream over Australia. J. Meteor. **9**, 279—284.
- Lamb, H. H. 1952 : South Polar Atmospheric Circulation and the Nourishment of the Antarctic ice-cap. Meteor Mag. **81**, 33—42.
- Gibbs, W. J. 1953 : A Comparison of Hemispheric Circulation with Particular reference to the Western Pacific. Quart. J. R. meteor. Soc. **79**, No. 339. 121—136.
- Rubin, M. J. 1953 : Seasonal Variations of the Antarctic Tropopause. J. Meteor. **10**, 127—134.
- Vowinckel E., and Oosthuizen, C. M., 1953 : Weather types and weather elements over the Antarctic Ocean during the whaling season. Notos, **2**, 157—182.
- Rubin, M. J. and Loon, H. 1954 : Aspects of the circulation of the Southern Hemisphere. J. Meteor. **2**, 68—76.
- Lamb, H. H. and Commander G. P. Britton. 1955 : General Atmospheric Circulation and Weather Variations in the Antarctic. Geogr. J. CXXI. Part **3**, 334—349.
- Vowinckel, E. 1955 : Southern Hemisphere Weather Map Analysis. Five year mean Pressures. Notos, **II**, 204—216.

＝書 評＝

日本の大火 (明治元年—昭和20年)

損害保険料率算定会災害科学研究会編

B5判 153頁 定価600円 技報堂発行

2, 3年前から火災保険料が下がった。それでこういう料率算定会の存在を認められた人も多いと思う。算定会では火災保険料率を適正なものに近づけるために色々の調査や研究をしているのであるが、その仕事の一つに過去の大火の資料を整備するということがあった。昭和29年12月には同じ技報堂から“大火”調査資料(昭和21年—27年)が出版されたが、これは終戦後の大火について詳しい統一した様式での資料として価値あるものと認められ、建築学会の表彰を受けた。

今回出版された“日本の大火”は、その“大火”の姉妹篇とも言うべきもので、明治元年(1868年)から昭和20年(1945年)まで78年間の日本全国の大火を前者よりはずっと簡単ではあるが統一のある様式に従って整理している。編は3つに分けられ、第1編は大火性状の統計的研究、第2編は統計、図表、全国分布地図、第3編は年次別大火調査資料である。

第1編の中には日本の大火、調査の方法等の章があり、世界の大火、江戸大火災、大阪や京都の大火災史も略説している。調査の方法の所では焼失建物50戸以上、棟数20棟以上、焼失土地面積1,000坪以上を大火ととるという説明がある。また既往の文献についてという節もあり、大火資料文献について一々批評を加えているのは参考になる。

最も貴重な資料は第3編であろう。ここには毎年個々の大火について、場所、年月日、出火鎮火時刻、焼失戸数、坪数、損害額、気象、原因等の欄があり、この篇が全体の約半分を占めている。これを統計したのが第2篇で、ここには気象の眼で見て面白い図が沢山含まれている。(島山久尙)

自然地理学文献目録 (邦文1940—1953)

地形学談話会編 三省堂 B5 145頁

定価450円 昭和31年5月

最近、各方面で文献目録の刊行が相ついでいる。研究者にとってまことに喜びにたえない。特に自分の専門から少し離れた領域の文献を探するときには、目録はこの上なくありがたいものである。さらに、戦争中から戦後の混乱期のものは、雑誌を手にもふれることすら困難な場合も多く、ここに紹介する文献目録は、この意味でも大いに価値あると思う。内容は大きく事項別と地域別に分類されている。含まれる分野は、地形学、陸水学、海洋学、土壌学、地球物理学、気候学、地質学、図学・測量、生物地理、災害、雑、単行本であって、これらを各地方で県をさらに小さく区分した位の広さで、地域別に再編成している。含まれている論文の数は約3500で、集められた主な雑誌は約70種にのぼる。

8ポ1段組みではあるが、印刷は鮮明だから、大して苦にはならない。とにかく、気象学関係者が座右にそなえるべき一書であろう。(吉野正敏)